

英語圏における『土佐日記』受容史の概略 (戦前編) : アストンとハリスを中心に

大野, ロベルト / ONO, Robert

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

153

(終了ページ / End Page)

185

(発行年 / Year)

2022-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025974>

〔論文〕

英語圏における『土佐日記』受容史の概略 (戦前編)

— アストンとハリスを中心に —

大野 ロベルト

ONO Robert

1 はじめに

紀貫之の『土佐日記』は藤原定家による書写を皮切りに近世では北村季吟や岸本由豆流、富士谷御杖ら多くの学者に注釈を施され、近代に入ってからはいよいよ中古文学を代表する作品、わけても日記文学および紀行文学の先駆として鑑賞され、教育現場でも存在感を発揮してきた。文学史上、貫之はまず第一勅撰集『古今和歌集』の撰者として評価されて然るべきだが、古くから『土佐日記』の作者としてこそ重視され、この傾向は近年ますます顕著である¹。

国内の『土佐日記』受容についてはひとまず上記のようにまとめることができる。一方、海外での受容についてその全体像を描くことは困難であるが、日本の古典で、海外でも明確な輪郭をもった作品として受容されているのは『源氏物語』くらいのものであろう。『土佐日記』は日本を専門とする研究者の、それもごく一部に知られているに過ぎない。したがって「海外での受容」という句が惹起する「日本国外での定着や評価」を期待することはそもそも無謀である。より現実的な態度として、『土佐日記』を外国語に置き換えたり、外国語を用いて『土佐日記』を研究したりという営為のみを焦点化すべきである。

『土佐日記』はこれまでに少なくとも5人の翻訳者によって英語圏

の読者への橋渡しがなされてきた。すなわちフローラ・ベスト・ハリス、ウィリアム・N・ポーター、G・W・サージェント、アール・マイナー、ヘレン・C・マッカラである。また抄訳を交えての紹介という形では、最初期にW・G・アストンがいる。このような受容史は、これまでその概略さえも整理されたことはなく、それぞれの翻訳の背景や影響関係を探ろうにも、とっかかりとなる情報にも乏しいのが現状である。したがって、まずはその基礎を固めることが本稿の目的となるが、概略とはいえ明治からの百年余の受容史を一編の論考で網羅することには無理がある。本稿では『土佐日記』が越境を開始した明治期の動向を、主にアストンとハリスの活動を軸に追うこととしたい。

2 ジャパノロジー黎明期の『土佐日記』

公的な場で初めて英語を用いて『土佐日記』を論じた人物は、おそらくW・G・アストン(William Geroge Aston, 1841-1911)ということになるであろう。それは1875年6月30日、日本アジア協会で行われた“An Ancient Japanese Classic”(ある日本古典)と題した報告であった。

開国以来、日本について知識を深める外国人は増え続けていたが、彼らのための交流の場は不足していた。そこで1872年に設立された学術団体が、日本アジア協会(以下「協会」)である。名称はイギリスのロイヤル・アジア協会を意識したもので、インドや中国にはすでに同協会の支部が置かれていたことから、いずれはその認可を受けようという目論見もあった²。

アストンはアイルランド出身の外交官である。通訳として日本の地を踏んだのは1864年であるから、すでに一廉の専門家となっていた。題目は抽象的であるが、The “Tosa Nikki,” or Tosa Diary という副題に明らかなように、報告は全体が『土佐日記』に割かれている。逐語的な議事録で9頁にわたる報告の冒頭で、アストンはまず作者の貫之

について語る。

The author was a Court noble named Tsurayuki, who traced his descent in a direct line from one of the Mikados, and whose history is little more than the record of the successive offices he held at Kiôto, and in the provinces. One of his appointments was to the prefecture of Tosa, and it was on his journey back to Kiôto, after having completed the four years which were then the fixed term for such offices, that he wrote the Diary which is the subject of the present paper. Tsurayuki is also known as a poet of considerable eminence, and as the author of the famous preface to the Kokinshû, extolled by Japanese critics as the most perfect specimen of composition extant in the native style.³

作者は貫之という宮廷貴族で、彼は帝の直接の子孫であるが、京都や地方で歴任した官職の記録のほかには、多くは知られていない。その官職の一つで土佐という地域へ赴いた貫之は、当時の定められた任期であった四年を務めあげて帰路についたが、そこで本発表の主題であるところの『日記』を書いたのである。貫之はまた歌人としても大物であり、『古今集』の有名な序文の作者でもあるが、これは日本の批評家たちによって、文章の模範として最高峰のものと激賞されているのである。(拙訳、以下同)

報告は次いで、言語的な観点から、『土佐日記』の本質的な価値を述べている。重要な箇所であるから、煩を厭わずに引くことにする。

Tsurayuki begins by telling his readers that diaries being commonly written by men, this is an attempt to write a woman's diary. Hence he always speaks of himself in the third person, under the vague

designation of a 'certain man.' But in Tsurayuki's day something more than this was implied by the phrase 'a woman's diary.' The learned were at this time devoted to the study of Chinese, and rarely composed in any other language, whilst the cultivation of the Japanese language was in a great measure abandoned to women. It is honorable to the women of Japan that they nobly discharged the task which devolved upon them of maintaining the credit of their native literature. I believe no parallel is to be found in the history of European letters to the remarkable fact that a very large proportion of the best writings of the best age of Japanese literature was the work of women... It is evident, therefore, that when Tsurayuki spoke of writing a 'woman's diary' he meant a diary composed in the style usually employed by the women of that period.⁴

貫之はまず、日記はふつう男性によって書かれるが、これは女性
の日記を書く試みなのである、と読者に伝えるところから始めて
いる。したがって自身のことについて語るときには必ず三人称を
用い、さらに「ある人」という曖昧な呼称を選ぶ。しかし貫之の
時代、「女性の日記」という句からは単にそれ以上のことが示唆
される。当時の学識者は漢文の勉強に力を注いでおり、その他の
言語で文章を書くことは滅多になかった。それゆえ日本語を磨き
上げるといふ仕事は、かなりの部分が女性に任されていたのであ
る。故郷の文学の価値を維持するという、自分たちに委ねられた
責務を、尊敬すべき日本の女性たちは見事に果たしたのだ。日本
文学の最良の時期の、なかでも最良の作品の大部分が女性によっ
て書かれているのは驚くべきことで、ヨーロッパ文学の歴史には
これに対応するような事例はないと思われる。(中略) したがっ
て貫之が「女性の日記」と言うとき、それが当時の女性がふつう

用いた文体で書かれた日記を指すことは明らかである。

アストンがここで論じている古典文学の特徴—すなわち男性的な、漢文による公の書記行為に対して、女性的な、仮名による私的な書記行為という二つの位相があり、後者の拠点であるいわばサロンの環境のなかで、日本語による文芸がめざましい発展を遂げたということ—に関しては、今日でも十分に通用する見方である。厳密には、引用末尾にある「女性が日記を書く際にふつう用いた様式」は当時まだ確立されておらず、むしろ『土佐日記』がそれを促進した側面があると言えるが、いずれにせよ仮名による散文の創作ということがすでに重大事であり、貫之自身がそれを大いに意識していたという指摘は正鵠を射ていよう。

このような導入を経てアストンは、『土佐日記』の興味深い場面を抜き出し、部分的に翻訳しつつ要約する、という作業を繰り返す。以下、おおまかな流れを確認しながら、適宜注釈を加えることにしよう。

まず、作品の冒頭部分である。最初の一週間、別宴で盃や詩を交わしながら過ごした貫之一行は、十二月二十七日について出発する。だがその途端、亡くなった幼い女兒を置いて帰らねばならないことを貫之が嘆いたので、一行はすっかり暗鬱になってしまう。そこへ新国司の兄弟がやって来て、再び宴となるが、楫取に急かされて一行は船に戻る。

この場面で注意すべきは、貫之らしき人物が作中では「ある人」と輪郭をぼかされていることを自ら指摘していたにもかかわらず、アストンが主人公を「貫之」と明記している点である。もっとも、そのほうが聴衆にとって理解しやすいことは言うまでもないし、現に歴史上、『土佐日記』はしばしば貫之の実体験として受容されてきたのである。

ところで、作中に酒宴の場面が多いためか、アストンは一行には無類の酒飲みが揃っていると解釈したようだ。例えば楫取の登場する場

面をより詳しく見てみると、

Their jollity was interrupted by the master of the junk, who summoned them on board. There was a fair wind, he said, and the tide served; and Tsurayuki maliciously adds that there was no more *saké* to drink.⁵

楫取に乗船を命じられて、一行の興趣は腰を折られてしまった。順風が吹いており、潮目もよいというのである。貫之は悪意を込めて、もう飲むべき酒もないからであろう、と言い添える。

とある。ジャンク船という名詞が適切かどうかはともかく、その責任者である楫取の催促に対して、貫之が皮肉な態度をとっているという解釈である。この箇所原文は「楫取もののあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば」であり、歌を詠み交わして別れを惜しむ貴族たちの心の機微を理解できない、「もののあはれ」を知らない楫取の性質が浮かび上がる場面であるが、アストンはむしろ「おのれし酒をくらひつれば」、すなわち「自分では酒を飲み尽くしてしまったものだから」という後半部分に注目する。

さらにアストンは元日の記事の、医師にもらった白散（漢方薬）が海に落ちてしまう場面を紹介しているが、ここでは誤読がなされている。

Presents of eatables and drinkables still came in, but more sparingly, and Tsurayuki records regretfully the fate of a bottle of *saké*, which he had stuck in the roof of the cabin, but which was displaced by the rolling of the junk and fell overboard.⁶

食べものや酒の贈りものがあつたが、それもだんだん少なくなっ

てきた。また貫之は船室の屋根に挟んでおいた酒瓶が、夜の間に船が揺れ、海に落ちてしまったことを、残念そうに報告している。

白散が酒に混ぜて飲むものであることは原文にも明記されているが、海に落ちたのが白散ではなく酒であると誤読し、しかもそれを近代的な連想を誘う「酒瓶」と表現していることには笑いを誘われる。楫取に対する皮肉と合わせて、まるで貫之が中毒者のように酒にこだわっていると読めるからである。

そこから先、すなわち大湊を経て室津へ、そして周辺に跋扈する海賊の噂に恐怖しながら本州へ、という旅程は、かなり簡潔に描写される。その後、アストンがやや紙幅を割いて紹介するのが二月五日の記事である。

そこでとくに注目されるのは、楫取が何気なく口にした「御船より、仰せ給ふなり。朝北の、出で来ぬ先に、綱手はや引け」という言葉が、偶然にも三十一文字であったことから歌のように聞こえ、周囲が驚くという場面である。アストンがこの箇所に着かれたのは、それが当時の話し言葉の響きを留めていると判断したからだ。

The only form here which is distinctively colloquial is *de* for *ni te*, while *mifune* and *tabu nari* are now written forms, and would not be used in the spoken language.⁷

ここで明らかに口語的なのは「にて」に相当する「で」のみである。一方「御船」や「給ふなり」は現在では書き言葉であり、話し言葉としては用いられない。

この分析に問題があることは言うをまたない。まず「にて」に相当する「で」というのが、本文には見当たらない。唯一該当するのは「綱手」の「で」である。つまり「綱手を早く引け」という文を、アスト

ンは「綱で早く引け」という意味にとったことになる。あるいは文字ではなく、音声で判断したのだろうか。また、より本質的な問題として、台詞は必ずしも話し言葉をそのまま写しとるものではない⁸。したがって楫取の台詞から当時の話し言葉について示唆を得ようとすることは現在から見れば的外れと言わざるを得ないが、明治期の日本語研究の前線にいたアストンにしてみれば、当然それは一考の価値ある問題であった。

翌六日に難波に到着してからの旅程は、再び手短に整理される。次に詳細に取り上げられるのは日記の掉尾を飾る二月十六日の記事の後半の、一行が屋敷に帰りついてからの場面である。隣人に留守中の管理を頼んでおいたにもかかわらず荒れ果てたわが家の姿に一行は打ちひしがれるが、相手に悪気のあったことでもなく、すでに夜分でもあり、文字通りの泣き寝入りとなる。ところで庭の一隅には池があり、そこに小さな松が生えていて、亡くなった子供を思い起こさせるのであった。

原文ではここで二首の歌が詠まれるが、アストンはこれを割愛し、最後の一文のみを訳出する。研究でも取り上げられることの多い「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、とく破りてむ」である。アストンの訳を掲げ、直訳してみる。

I cannot write down all my many regrets and memories; be it for good or for evil, here I will fling away my pen.⁹

後悔や思い出をすべて書き記すわけにはいかない。良きにつけ悪しきにつけ、この辺りで筆を放り出すことにする。

破棄されるものが紙でなく筆（ペン）に変わっているのは、書くという行為の主体を表現するのに都合がよいからであろう。いずれにせよアストンには、和歌を翻訳することで亡児のために涙を流す心の機

微に迫るよりも、「女性にふさわしい文体」で日記を書き継いできた「貫之」が、書き手として文章をしめくくる箇所を再現するほうが重要なのである。だがこれを受けてアストンが記す全体の結論には、やや腑に落ちない点もある。

The *Tosa Nikki* is a striking example of the truth of Buffon's dictum that "style is everything." It contains no exciting adventures or romantic situations; there are in it no wise maxims or novel information; its only merit is that it describes in simple yet elegant language the ordinary life of a traveller in Japan at the time when it was written. But these qualities have gained it a high rank amongst Japanese classics, and have ensured its being handed down to our own day as a most esteemed model for composition in the native Japanese style.

I may observe in conclusion that the Japanese of the *Tosa Nikki* is on the whole tolerably easy, and it may be recommended as a good book with which to begin the study of the ancient literature of Japan.¹⁰

『土佐日記』は「文体こそすべてである」というビュフォンの金言を見事に証明するものであろう。興奮すべき冒険譚や、ロマンチックな場面などは作中には登場しない。賢い警句も、新奇な情報もない。それが優れているのはただ、そこに当時の日本の旅人のふつうの暮らしが、単純かつ優美な言葉で綴られているという点に拠るのである。だが、それだからこそ『土佐日記』は日本古典のなかでも高みへのぼり、日本独自の創作物の模範として今日まで継承されてきたのだ。

結論として述べるならば、『土佐日記』の日本語はさほど難しいものではなく、これから日本の古典文学を学ぼうとする者に良書

として勧められるものと思う。

まず『土佐日記』と直接の関係はないが、「ビュフォン」が誰を指すかは不明である。知名度のあるところではジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド・ビュフォン（1707-1788）がいる。多方面で活躍した博物学者で著作も多く、文体について一家言をもったとしても不思議はない。とはいえ、ここでわざわざ言及する必要はない気もする。

また意外に響くのは、アストンが『土佐日記』をかなり地味な作品と捉えていることである。海賊を恐れて船路を急ぐ場面など、動的な要素もあるが、その程度では「冒険譚」の名に値しないということだろうか。「ロマンチックな場面」はともかくとして、諧謔を交えた警句は全篇に散りばめられているし、そもそも日記の体裁をとる物語という形態そのものが、「新奇」以外の何物でもない。それを「当時の日本の旅人のふつうの暮し」を描いたものであるとは、従前の分析の信頼性を損ないかねない浅慮である。もとより比較の対象もないため、「単純」という言葉にはさして意味がないが、あるいはそこには、東洋の古典が複雑であるはずがないという偏見が作用しているのかもしれない。

このように、アストンがどれほど『土佐日記』に感銘を受けたかという点には実は疑問が残るのである。あくまで著名な古典作品を英語圏に紹介するのが報告の趣旨であった、というのが正確なところであろう。

3 最初の英訳者—フローラ・ベスト・ハリス

『土佐日記』を初めて完訳したのはフローラ・ベスト・ハリス（Flora Best Harris, 1850-1909）という女性であった。これまでほとんど研究

されなかったハリスの生涯と、都合3度にわたる英訳『土佐日記』の出版事情についてはすでに拙稿で論じているので、ここでは詳らかにしない¹¹。本稿では要点に絞ってその業績を振り返ったうえで、まだ検討できていないアストンとの影響関係について整理したい。

その生涯に横溢する日本への愛着と、古典作品の英訳という先駆的な仕事を成し遂げるほどの日本語への造詣の深さからすれば意外の感があるが、ハリスが60年に満たない生涯のうち日本で過ごした期間は通算わずか12年ほどである。これは日本に家庭をもち骨を埋めることも多かった御雇外国人や、アストンにバジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) とアーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow, 1843-1929) を加えたいわゆる「三大ジャパノロジスト」と比較しても短い。だがハリスが途中で帰米せざるを得なかったのは病弱のためで、本人の意とするところではなかった。

アジアで伝道するという少女時代からの夢を実現すべくハリスが夫のメリマンと来日したのは1873年の暮れである。任地の函館で布教と女子教育に注力したのち、妊娠を機に1877年、最初の帰米を断行した。だが無事に産まれた女兒は翌年、日本への航路上で亡くなってしまう。その後、今度は東京を拠点に日々を送ったが、健康を害した1882年に再び帰米し、実に1905年まで留まった。いまいちど日本で過ごしたのは、その1905年から亡くなる1909年までの最晩年である。

在米中にも日本からの移民を援助するなど、日本との関わりが薄れることはなかったが、ハリスが積極的に日本の言葉や文学を学んだのは、物理的に日本に滞在していた期間だけであると考えられる。しかも3度の翻訳の基礎となっているのは1882年に横浜の英字新聞 *The Japan Weekly Mail* (『ジャパン・メイル』) に連載された最初の訳稿であり、あとの2つの版はこれに若干の彫琢を加えたものに過ぎない。むろん1873年にアメリカを発つまえに日本語の勉強を始めていた形跡もないから、つまりハリスは出産のための帰国を挟んだ、前後9年

ほどの日本滞在の間に、『土佐日記』を訳せるだけの知識を得たことになる。

とはいえ、いかに優れた仕事も、他者の目に触れ、何らかの形で評価されないことにはすぐに埋もれてしまう。英訳『土佐日記』は『ジャパン・メール』紙上に7度にわたり連載されたが、第三者による言及はきわめて限定的で、管見に入ったのは発表の3年後、チェンバレンが1885年3月18日に協会で行った報告“On the Various Styles Used in Japanese Literature”（日本文学における様々な文体について）のみである。これは日本文学で用いられる文体の種類やその文法的特徴を、主に大陸との影響関係から論ずるもので、以下はそのうち散文を扱う箇所の一節である。

The best example of Early Classical prose is Tsurayuki's celebrated “Tosa Niki,” or “Diary of a Voyage Home from Tosa,” an anonymous translation of which appeared in the “Japan Mail” during the months of January, February, and March, 1882. Mr. Aston has also given a summary of it, with a few extracts, in Vol. III, Pt. II of these “Transactions.”¹²

古典初期の散文の模範は貫之の有名な『土佐日記』、あるいは『土佐からの帰京の旅の日記』で、1882年の1月、2月、3月には、匿名の翻訳が『ジャパン・メール』紙に出ている。またアストン氏も、私たちの「会議録」の第3巻2部で、いくつかの抜粋とともに、その内容を要約している。

内容に踏み込んでいない点が残念だが、少なくともチェンバレンにとっては、アストンの報告に加えて、ハリスによる英訳が、『土佐日記』に関する2点の既存文献として認知されていたことになる。また完訳であるハリスの仕事を先に挙げ、優位に置いているように見えること

も重要であろう。

すると気になるのが、アストンとハリスの影響関係である。まずは1891年に書籍の形で上梓された英訳『土佐日記』に、ハリスが付した覚書の書き出しを見てみたい。

Tsurayuki, one of the classical writers of old Japan, was born near the close of the 9th, and died about the close of the 10th Century. The family to which he belonged, claimed royal descent, and his personal history is remarkable for the political honors conferred upon him as well as for the fame which he justly earned by the “divine right” of genius.

While no one questions his claim to distinction as poet and critic, students of Japanese literature owe him an especial debt of gratitude. In an age when scholars were neglecting their own beautiful tongue to write in stilted Chinese, the wiser poet chose the native language treasured by the daughters of his land, as a fitting vehicle for his thoughts.¹³

古き日本の古典作家の一人である貫之は、九世紀の終わろうとする頃に生まれ、十世紀の終わろうとする頃に没した。皇族の裔を自認する家門に連なる彼は、個人としても目覚ましい遍歴を重ねた。政治的な榮譽を得たのみならず、天才という「神授の権利」によって、その身にふさわしい名声をも手にしたのである。彼が歌人として、批評家として優れていることを疑う者はないが、彼にとくに感謝すべきは日本文学の徒であろう。学者たちがまだ自国の美しい言葉よりも窮屈な漢文で書くことを選んでいた時代に、この賢明な歌人は土地の女性たちに倣い、母国語こそ自らの思想を伝えるのに適した言語であると考えたのである。

なるほど同じ貫之という人物を対象にしている以上、避けがたいこととはいえ、ハリスの挙げる貫之の特徴、すなわち宮廷の重要な文学者であり、公的に奨励された漢文ではなく、女性的な位相にあった日本独自の言葉で書くことを選んだ、という特徴は、アストンの報告にも見られたものであった。また興味深いのは、ハリスもアストンも貫之を「帝の末裔」としていることである。確かに紀氏はかつて帝の外戚であったが、一時期のことであり、貫之が帝の血脈であるという指摘は当たらない。アストンがどのような経緯で貫之の血統を措定したにしろ、ハリスのほうは、アストンの報告を読み、その影響下に同様の記述をしたという推測は成り立つであろう。

さらに、ハリスもまた『土佐日記』および古典文学を必要以上に単純なものと捉えている節があることは、この見方を裏打ちするのである。

Perhaps, the fact that Japanese literary work of the olden time is so simple in form as to disarm criticism, may account for our neglect; the would-be critic is beguiled by its constant, delicate charm, into longing for some rugged turn of phrase or manner, to break its sweet monotony.¹⁴

おそらく、われわれがこれまで古代の日本文学を軽視してきたのは、その批評を必要としないほどの単純さにもよるであろう。批評をしようと向き合ってみても、淡々とした、繊細な魅力に呆気にとられてしまい、言葉遣いや語り口がどこかで荒々しく方向転換をして、甘美な調子を崩してはくれぬかと期待するような羽目に陥るのである。

むろん、これはハリスが自身でたどり着いた見方でもあったのかも知れない。だがいくら優秀でも、「古代の日本文学」の全体について「批

評を必要としないほどの単純さ」を指摘できるほど、ハリスが和文に精通していたとは思われないのである。むしろハリスは、アストンの報告をはじめとする先達の指摘を、再生産したに過ぎないのではないか。

本稿では、ハリスがアストンの説を無批判に借用したとか、それがハリスの独自性の欠如ゆえであるといった指摘をするつもりは毛頭ない。貫之に関して英語で書かれた文献がほとんど皆無という状況では、先行する意見を大いに参考に供するのは当然であろう。また当時の在日外国人のコミュニティは、現在よりも遥かに緊密であった。日本に対する学究的関心がすこしでもあれば、協会の活動には目配りをしていたはずである。しかもハリスの場合には、夫のメリマンが1879年5月13日の総会をもって、正式な会員となっているのだ。女性にその資格があれば、本人も率先して入会しただろう。いずれにせよハリスには、議事録等でアストンの報告に触れる機会があったと考えるべきである。

それではアストンのほうは、ハリスの訳業を知っていたらどうか。結論から言えば、その蓋然性は高いと思われるものの、確証には欠けるのである。以下、雑誌 *Chrysanthemum* におけるハリスとメリマンの活動を検討しつつ、その根拠を整理したい。

4 雑誌『菊』一夫婦そろっての寄稿

メリマンは熱心な宣教師であったのみならず、日本文化に対しても妻に負けない関心をもっていた。例えば1881年、メリマンは創刊されたばかりの *Chrysanthemum* (『菊』) という、「日本および極東に関する月刊誌」に、2種の記事を寄稿している¹⁵。具体的には第2号である2月号をはじめ、3月号、6月号、9月号に、日本のことわざを紹介する“Japanese Proverbs”を、そして10月号には、福澤諭吉らの講演を翻訳紹介する“Japanese Lectures”を掲載しているのである。

後者の記事は、福澤諭吉が同年夏に東京三田で行った講演の英訳“Fukuzawa's Lecture on Religion”と、福澤と同じくキリスト教反対の立場をとる僧侶が京都の集会で行ったという講演の英訳“Christianity, A National Injury”からなっている。これらの内容について詳らかにすることは本稿の関心を逸脱するが、この年は同志社の学生と地元京都の人々の間で反目が強まり、本願寺から慶応大学にキリスト教排斥演説の依頼がなされるなど、にわかに宗教対立が深まっていた¹⁶。ここに訳出された講演もその渦中でなされたものである。

メリマンは宣教師の立場ではあるが、講演の内容については一切論評せず、講演の翻訳の合間に、

The above is a good illustration of one form of opposition to Christianity in Japan now being waged by Mr. Fukuzawa's scholars and a large number of Buddhist priests, the following is another.¹⁷

上の演説は目下のところ日本で福澤氏の派閥に属する識者たち、それに大勢の仏教の僧侶たちが牽引している反キリスト教運動の内容をよく示すもので、以下も同様である。

という文を挿入しているだけである。むろん福澤は個人的にはキリスト教に造詣が深く、十戒などを素材にした教訓集『ひゞのをしへ』を息子たちのために書いたことが知られるほか、何名もの宣教師を自宅へ寄寓させたり、慶應義塾に迎え入れたりしている¹⁸。福澤が政治的な立場としてキリスト教を遠ざけたのは、『学問のすゝめ』など多くの著書で示されているように、無批判に外国の宗教を受け入れるような態度を戒めるためであろう。

ところで『菊』には、メリマンだけでなくハリスも寄稿している。それも創刊号から渡米直前の1882年1月号まで、掲載が5度にものぼる常連であった。投稿内容は基本的に詩であるが、あるものは日本の

詩歌の英訳、あるものは古典の詩歌に触発された現代詩の英訳、またあるものはハリス自身による創作という具合に、内容は様々である。しかもそれらが、詳しい説明もないまま、当然のように並列されているのだ。いわば『菊』誌上で展開されたのは、ハリスの筆が赴くままに現前する、自由な詩的空間ということになるのか。

いずれも短いが多岐にわたるこれらの投稿は紙幅を割いて論ずるに足るものだが、本稿ではとくに興味深い点を挙げるに留めたい。まず第一に、これらの投稿を見ると、ハリスが和歌と仮名文のみならず、漢詩の英訳にも手を染めていたことがわかる。そして第二に、ハリスがどのように日本語を習得したのかという問題について、すこし光明を得ることができるのである。

第一の点の根拠となるのは、1881年3月号に掲載された、“Written by the Accomplished and Virtuous Daughter of the Emperor Saga” との見出しをつけられた詩と¹⁹、同年6月号に掲載された “On the Flowers Falling into the Lake (Written by the Daughter of the Emperor Saga)” と題された詩である²⁰。原詩の併記はなく、また作者の名もないが、嵯峨天皇の皇女という点から探ってゆけば、作者は有智子内親王であり、作品は前者が「寂寂幽庄水樹裏」で始まる『続日本後紀』巻十七所収の七言律、後者が「聖制江上落花詞」と題された『雑言奉和』中の一詩であることが類推できる。試みに原詩と英訳を比較してみるならば、前者は以下のようなものである。

(原詩と訓み下し)²¹

寂寂幽庄水樹裏
仙輿一降一池塘
栖林孤鳥織春澤
隱澗寒花見日光
泉聲近報初雷響

寂寂たり幽庄水樹裏、
仙輿一たび降る一池塘。
林に栖む孤鳥春沢を織り、
澗に隠る寒花日光を見る。
泉聲近く報ず初雷の響を、

山色高晴暮雨行
 従比更知恩顧渥
 生涯何以答穹蒼

山色高く晴れ暮雨行く。
 比従更に恩顧の渥を知る、
 生涯何を以ってか蒼穹に答へん。

(英訳)

Deep in depth of wintry dell,
 One Flower looked with lifted gaze on the Sun-
 Deep in lonely, woodland maze- though but one-
 There's a Bird that knoweth well
 Of the Spring-tide's coming spell.
 Seated on Thy Throne apart,
 Thou the Spring and Sunshine art,
 I, the lone Bird, know Thy grace,
 I, the Winter-flower, beholding
 Feel the brightness of Thy face!

原詩は父である嵯峨天皇の行幸に対する内親王の感動を歌ったもので、自らを人里離れた山奥に住む「孤鳥」や谷間の「寒花」にたとえ、大空のような父の大恩に尽きせぬ感謝を表明している。これに対して10行と拡張された英訳では、モチーフの登場する順序が組み変わっており、なおかつ父王への感謝という主題も雲散しているように感じられるものの、一人称と結びついた「lone Bird = 孤鳥」や「Winter-flower = 寒花」など個々の概念は再現されており、「Throne」すなわち玉座にまします偉大なる存在の尊顔を讃えるという結句には、原詩の雰囲気がある程度まで活かされていると言えよう。

要するにハリスの訳はかなり自由なものであり、厳密さよりも東洋的な詩情を英語で伝えることに重きを置いている印象である。いずれにせよ、ハリスが『土佐日記』のような仮名のテキストのみならず漢

詩の英訳をも手がけていたことは興味深い事実であろう。

むろん翻訳に際しては、ハリスを援助した人物が存在すると思われるべきである。そもそも漢詩は「日本語」を学習したところで容易に読解できるものではない。前述の拙稿ではすでに、山鹿旗之進による伝記『はりす夫人』の記述を根拠に、その人物が作詞家の里見義（1824-1886）であり、ハリスとの「師弟関係」が始まったのは、里見が文部省の音楽取調掛となって東京へ赴任した1881年頃である可能性を指摘しておいたが、『菊』創刊号である1881年1月号に掲載されたハリスの原稿は、まさにこれを裏書きするものである。

というのも、その“To a Chrysanthemum Flower”（菊の花に）という詩は、題名からして雑誌の創刊を祝う意味合いが込められていると思われるが、実はハリスの創作ではなく、副題にあるとおり、A Poem by “Satomi Sensei” すなわち里見による詩の英訳なのである。

O bloom of chrysanthemums!

Fabled of old

A fountain of rapture

And sweetness untold-²²

以上の4行から始まるこの詩の原詩を特定することは、いまのところできていない。だがここで想起されるのは、里見の代表作の一つ「庭の千草」である。参考までにその冒頭の4行は以下の通り。

庭の千草も、虫の音も、

かれてさびしく、なりにけり。

ああ白菊、ああ白菊。

ひとりおくれて、さきにけり。

この詞は1884年、文部省音楽取調掛の編集になる『小学唱歌集』の一篇として発表されることになるのだが、当初の題は「菊」であった²³。これは憶測に過ぎないが、ハリスとやりとりするなかで菊をモチーフとした作詩を経験した里見が、数年後にアイルランド民謡の旋律に合わせた作詞を手がけることになった際に、かつての経験を活かした可能性は否定できないと思うのである。いずれにせよ、1881年の時点でハリスと里見が「先生」と呼び、呼ばれるほどの関係であったことは間違いない。

以上のように、当時のジャパノロジーに一定の役割を果たした雑誌『菊』に、ハリスとメリマンが夫婦ともに関わっていたことは重要である。だがその事実のみをもって、アストンがハリスを知っていたと断言することは難しい。しかも『ジャパン・メール』に英訳『土佐日記』を連載したとき同様、ハリスはここでもFBHの頭文字を用いて匿名を貫いている。

『ジャパン・メール』にはそもそも匿名の記事が多いが、『菊』ではメリマンを含めほとんどの投稿者が本名を記しているため、ハリスは意図的に名前を秘したことになる。なるほど文学を余暇と考え、匿名で実践した可能性はある。しかしジェンダーの問題も一考に値しよう。というのも『菊』には、例えば前年に出版されたイザベラ・バード『日本奥地紀行』に対する長文の書評などは見られるものの²⁴、女性によって直接執筆された記事は見当たらないからである。

ハリスの『土佐日記』を読んだらしいチェンバレンは『菊』には執筆していないが、その著書 *The Classical Poetry of the Japanese* についての書評が掲載されていることから、おそらく雑誌の存在は知っていただろう²⁵。そうであるならば、チェンバレンは『菊』誌上で東洋の詩を自由闊達に翻訳する「FBH」に出会い、これと同じ人物の仕事として『土佐日記』を手にとったのかもしれない。

だがアストンの場合がどうであったかについては、残念ながら決め

手を欠く。次節ではすこし先の時点から振り返って考えてみよう。

5 アストンの『日本文学史』

アストンは1899年、大部の著作『日本文学史』を上梓する。これは文字通り日本文学の歴史を網羅的に記述した書である。ロンドンでウィリアム・ハイネマンにより出版された、それぞれの国や地域の文学史をその道の専門家が執筆する叢書“Short Histories of the Literatures of the World”の一冊であることと無関係ではないだろうが、扉のアストンの氏名にも「聖ジョージ・聖マイケル三等勲章受章、文学博士、英国東京公使館元書記官」とものものしい肩書きがあり、権威が演出されている²⁶。

確かに『古事記』および『日本書紀』から語り起こし、明治時代の『多情多恨』『新体詩抄』までを取り上げる同書は、英語で書かれた最初期の日本文学通史と言ってよく、重要な著作であることは疑いを容れない。だが『土佐日記』を扱う箇所を見ると、腑に落ちないところもある。これについては拙稿を引こう。

気になるのは、アストンはハリスをどのように評価していたのか、という点である。『日本文学史』の他の箇所を見ると、例えば『竹取物語』の項目ではディキンズを、『源氏物語』の項目では末松謙澄を、という具合に、アストンは先行する翻訳者の氏名をきちんと掲げている。ところが『土佐日記』に関しては、ハリスは一切言及されないのである。当時のジャパノロジーの中心的人物であったアストンが、アジア協会の会員の妻でもあるハリスの業績を知らなかったとは考えにくい。つまり非学識者の、非会員の、あるいは非男性の訳業として、故意に言及しなかった可能性もあるのだ。²⁷

アストンがハリスの訳業を知っていたのか否かという問いに明確な答えを出すことは難しいが、ハリスがジャパノロジーのいわば「界限」にいたことは動かしようのない事実である。『土佐日記』の英訳も、『菊』に掲載した記事も、いずれも匿名で発表されていることには留意が必要だが、FBHというイニシャルは記されており、無記名ではないから、一連の翻訳を発表した人物として認識される資格は十分である。

ハリスとアストンとの間に横たわる物理的・時間的な距離も、考慮に入れるべきであろう。『ジャパン・メール』紙上での『土佐日記』連載が終わる間際、1882年の春先に帰米したハリスが、1905年まで日本を離れていたことは前述のとおりである。書籍として最初にまとめられた英訳『土佐日記』の出版は1891年であった。これはハリスの地元ミードヴィルの出版社で発行されたものでもあり、さほど大きな部数を刷ったとも思われないうし、日本国内にすぐその存在が知られた証拠もなく、アストンの目に触れなくとも不思議ではない。またアストンの立場からすれば、仮に『ジャパン・メール』紙の連載を知っていたとしても、それはもう17年もまえの匿名の訳者による仕事であり、言及には及ばないという判断が下されたのかもしれない。まして自身の講演「ある日本古典」は1875年に行われたのだから、完訳とはいえ、ハリスのものが後発の仕事であることに変わりはないのである。

あるいは、アストンが何らかのきっかけで1891年版の書籍を読み、それでもなお取り上げなかった、という可能性もある。理由は様々に考えられよう。前述のように、専門家でない女性の業績を正面から取り上げる発想がなかったということも、当時の価値観に照らせばあり得ることである。また、もしハリスの覚書を読んだとすれば、そこに多少なりとも自身の講演からの影響を認めたであろう。したがって、自分の業績を参照しておきながら名も挙げないハリスに対して、アストンが反感を覚えた可能性も考慮すべきである。つまり『日本文学史』

でハリスの存在を無視したのは、その意趣返しのようなものであったかもしれないのだ。

互いの存在を認識して然るべきであるのに一切の言及がないという両者の関係に変化が生じるのは、二度目の英訳『土佐日記』の出版をもってである。出版は1910年で、ハリスはその前年に日本で没している。したがって新版は厳密には未完であるが、冒頭の新しい覚書には英訳『土佐日記』の出版をめぐる状況説明が加筆されており、アストンも登場している。

About the time the last paragraphs were placed in the printer's hands, a ship bore away the writer from the land of Tsurayuki. An enforced absence from Japan of nearly a quarter of a century prevented continued work, and the little beginnings made in classical study slipped away like a dream: otherwise the quaint Diary would long ago have been revised. In 1891, the translation was published by the firm of Flood and Vincent, in the United States, to preserve it in more permanent form... The little volume is now out of print, and although Dr. Aton[sic] has preserved its substance in his fascinating "History of Japanese Literature," I venture to offer the "Diary" in a form which it is hoped may prove of some service to students.²⁸

最後のいくつかの段落を印刷所に手渡したところで、一隻の船が筆者を貫之の国から運び去った。ほとんど四半世紀にわたり日本から引き離されていたため、仕事を続けることは難しかった。古典についてすこしは学んだことも、すっかり夢のように忘れてしまったのである。さもないとこの趣深い日記に、つとに推敲を加えていただろう。一八九一年に、米国のフラッド・アンド・ヴィンセント社から翻訳を出版したのは、訳稿をしっかりと保存する

ためであった。(中略) その小著もいまでは絶版となった。アトン博士がその精髓を大著『日本文学史』に留めているとはいえ、私は日本文学の徒に何らかの形で役立ててもらえればと、このような形でここに「日記」を奉ずるものである。

これまでの議論を踏まえれば、アストンを「アトン」と誤記していることに何か意図があるのではないかと考えたくなるが、この1910年版にはかなり誤植が多いため、これもその一つであろう。肝心なことは、ハリスが1899年刊の『日本文学史』を読み、それに刺激を受けたことが、自著を更新する一つのきっかけとなったと認めている点である。このことは、ハリスがアストンの1875年の講演を読み、1891年版の「覚書」執筆の時点でその影響を受けていた可能性をなおさら示唆するだけでなく、さらに重要なことに、『日本文学史』において自身の訳業が触れられていないことを、ハリスがはっきり知っていたことを意味する。そうであれば、『日本文学史』の価値を認めつつも敢えて自身の翻訳を刊行するのだという宣言の裏には、様々な感情もあったかもしれない。

『日本文学史』で展開される『土佐日記』論は、多少の異同はあるものの、ほぼ1875年の講演の再録であると言ってよい。その意味で、アストンがハリスに対して何かを負っているということはないのである。だが、もし自分では成し遂げることのなかった『土佐日記』の完訳を、ハリス（あるいはFBHなる人物）が発表したことを知っていたのなら、どこかで言及しておくべきであった。そうしておけば、ハリスの仕事が忘却されることはなかったかもしれないのだ。繰り返しになるが、新版の『土佐日記』が出版されたとき、ハリスはもうこの世の人ではない。アストンも翌年には鬼籍に入るから、活字に残る二人の「交流」はこれが最初で最後ということになる。

6 「決定版」の登場

ウィリアム・N・ポーター (William N. Porter, 1849-1929) による『土佐日記』の英訳、*The Tosa Diary*が刊行されたのは1912年である²⁹。それはハリスの新版『土佐日記』の出版からわずか2年後であるが、ポーターもまた、同年代であるハリスの訳業を知っていた証拠はない。だが本篇のまえの“Introduction”を見れば、そこにアストンからの影響を見ることは難しくないのである。

Ki no Tsurayuki was famous as a writer both of prose and poetry. Between the years 905 and 922 he, with assistance from others, compiled the *Kokinshū*, a famous collection of early Japanese poetry, to which he contributed a preface, which is much admired for its literary though somewhat flowery style. The Tosa Diary, which also ranks high among the literature of Old Japan, is, however, written in a very different tone. The English reader will no doubt be struck by its artless simplicity and quiet humour, which is as welcome as it is unexpected from a Japanese nobleman of the tenth century.³⁰

紀貫之は散文と韻文の双方で名声を博した作家である。彼は905年から922年にかけて、周囲の助けを借りながら、初期の著名な詩歌集である『古今集』を編纂し、序文を寄せたが、この一文は文学的でありながらも華やかな文体によって愛されてきた。『土佐日記』もまた日本の古き文学のなかで高い評価を得ているが、書きぶりは大きく異なる。この十世紀の日本の貴族による作品の、よい意味で期待を裏切る素朴な単純さと、静かなユーモアとは、英国の読者にとって間違いなく衝撃的であろう。

ハリスの「覚書」についても指摘したように、同じ紀貫之の『土佐日記』を扱う文章である以上、それがアストンのものとある程度まで

呼応するのは当然であろうが、やはり相似する部分が少なくないのである。さらにこの直後には実際にアストンの名が挙がり、『日本文学史』からの長い引用が行われる。

The late Dr. Aston in his *History of Japanese Literature* writes: The *Tosa Nikki* is a striking example of the importance of style. It contains no exciting adventures or romantic situations; there are in it no wise maxims or novel information; its only merit is that it describes in simple yet elegant language, and with a vein of playful humour, the ordinary life of a traveller in Japan at the time when it was written. But this has proved sufficient to give it a high rank amongst Japanese classics, and has ensured its being handed down to our own day as a most esteemed model for composition in the native Japanese style. It has been followed by many imitations, but has had no equal.³¹

故アストン博士は『日本文学史』のなかでこう書いている。『土佐日記』は文体というものの重要性を示す端的な例である。興奮すべき冒険譚や、ロマンチックな場面などは作中には登場しない。賢い警句も、新奇な情報もない。それが優れているのはただ、そこに当時の日本の旅人のふつうの暮らしが、単純かつ優美な言葉と、遊び心あるユーモアによって綴られているという点に拠るのである。だが、それだけで『土佐日記』が日本古典のなかの高みへとほるには十分であり、おかげでこの作品は日本独自の創作物の模範として今日まで継承されることが確実になったのである。『土佐日記』に続く亜流は多いが、肩を並べるようなものは存在しない。

上で引かれているのは『日本文学史』のなかの、『土佐日記』に関

する記述の末尾である。先に引用した1875年の講演「ある日本古典」の結論とほとんど重なるが、ビュフォンの名が消えるなど、多少の異同はある。いずれにせよ、1200語程度しかない短い導入の一割を割いて引用していることから、ポーターにとってアストンの業績が重要だったことは明らかである。ちなみに同じ文章のなかでポーターは、『土佐日記』の一行が乗っていた船の形状について、ボナーという人物の論考を参照しているが、これも協会で報告されたものである³²。当時の日本研究において、アストンの業績に限らず、協会の資料全般がいかに重要であったかがわかるだろう。だが第一級の資料の存在は、ときとしてさらなる資料を博搜する気概をくじく。『土佐日記』に魅了され、これを英訳しようと決意したポーターには、アストンという先達がいれば十分であった。

しかしながら、導入部にあるポーター自身による『土佐日記』の考察には、同意しかねる部分も少なくない。

The Japanese language as usually written is a combination of ideographic and phonetic characters, but Tsurayuki opens his diary by announcing that he intends to write it only in phonetics.³³

日本語はふつう、表意文字と表音文字の組み合わせで書かれていたが、貫之はその日記の冒頭で、自分は表意文字だけで書くつもりであると宣言している。

この説明では、漢文と仮名の対立という『土佐日記』の根幹に関わる部分が、現代的な意味における「漢字」と「平仮名」の区別に矮小化されているような誤解を招く。実際、これに続く箇所でもポーターは、

It is not known why he decided to dispense with ideographs and to

use phonetics only, which at the time had been in use for barely a hundred years; possibly it was for the sake of simplicity, and to enable the less educated to read his work. The Japanese commentators say that his rather cowardly dread of meeting the pirates and his excessive grief for his dead child would have been inconsistent with anything but a female writer.³⁴

彼がなぜ表意文字を捨て、当時まだ百年ほどしか使用されていなかった表音文字でのみ書こうと決めたのかは不明である。それは単純さを求めていることかもしれないし、教育をもたない者でも作品に触れられるようにするためかもしれない。日本の評者たちは、貫之が海賊に出逢うことをひどく恐れる臆病なところや、子供の死を過剰に嘆くところなどは、女性の作者でなければ不釣り合いとされるような性質であると述べている。

という論を展開しており、漢文と仮名の関係について知識が不十分であることや、『土佐日記』の主人公が貫之その人であるという単純な見方を無批判に受け入れていたことを、図らずも露見させている。だがそれは文中にある「評者たち」の影響かもしれない、ポーターが誰から古典の知識を得ていたかは、当然ながら興味深い問題である。なお、末尾の謝辞にはMr. Choichi FujinoとMajor H. Haraguchiが挙がっている³⁵。

ともあれポーター訳の『土佐日記』は、一つの成果として優れたものである。その大きな特徴は、左頁に原文のローマ字表記を、右頁に英訳を掲載した、いわゆる対照版になっていることである。さらに和歌についても工夫を凝らし、英訳でも5・7・5・7・7の音節を再現している。詩歌を翻訳する際に音声面にどこまでこだわるべきかについては様々な見方もあろうが、それが簡単なことではないのは明らかで、

『土佐日記』でこれを実践しているのは、ポーターのほかには現時点で最新のマッカラ訳のみである³⁶。また、これは過剰解釈の誹りを免れない部分もあるが、日記の日付についてもグレゴリオ暦への変換がなされ、読者の便宜が図られている。

ポーター訳『土佐日記』は、1981年にタトル社からペーパーバックで再版されている³⁷。マッカラ訳や、それに先んずるマイナー訳が掲載された専門書と比較して格段に手に取りやすいこともあり³⁸、今日ではポーター訳こそが英訳『土佐日記』のスタンダードとなっているのである。また、ハリスの訳業は大きな注目を集めることがなかったため、1950年代にドナルド・キーンの編著の一部としてサージェントによる抄訳が発表されるまで³⁹、ポーター訳は英文で読める事実上唯一の『土佐日記』であった。それは言うまでもなくこの訳業が、英語圏、あるいは広く海外の読者全般にとって、『土佐日記』そのものであったことを意味する。二十世紀の海外における『土佐日記』受容は、同書を経由して行われたといっても過言ではないのである。したがって本書の内容を精査することは『土佐日記』の受容について考察するうえできわめて有意義であるが、それはまた異なる論文の主題ということになるだろう。

7 おわりに

本稿ではジャパノロジー黎明期にあたる明治期に『土佐日記』を英語で紹介したアストンとハリスの活動を中心に取り上げた。ハリスはアストンから多少の影響を受けたことが推測されるが、一方でアストンはハリスによる『土佐日記』完訳という達成を知らなかったか、知っていたとしても言及することはなかったため、両者の間に建設的な応答関係が成立することはなかった。ハリスはアストンのみならず、当時の日本研究者の誰からも積極的に評価されることはなく、速やかに忘却の淵へ追いやられることとなった。ちょうど大正元年にあたる

1912年に『土佐日記』の英訳を完遂したポーターでさえ、ハリスに一言も触れていないことは象徴的である。

英訳『土佐日記』のなかで最も広く読まれているのはこのポーターのものであるが、『土佐日記』は戦後にもさらに3人の訳者によって英語圏に受容されることになる。だがそれらは、もはや神秘的な「東洋」に対する「西洋」のまなざしを多分に含んだジャパノロジーではなく、敗戦国である「日本」に対する「欧米諸国」のまなざしを反映した、戦後の日本研究の枠組みのなかで実践されたものであり、したがって、稿を改めて論じられるべきものであろう。

【付記】本研究はJSPS科研費（JP19K13150）の助成を受けている。

注

- 1 この問題は拙著『紀貫之』（東京堂出版、2019年）第九章でも取り上げた。
- 2 楠家重敏『ジャパノロジーことはじめ 日本アジア協会の研究』晃洋書房、2017年。
- 3 Aston, W. G. “An Ancient Japanese Classic: The ‘Tosa Nikki,’ or Tosa Diary,” in *Transactions of The Asiatic Society of Japan*. Vol. III, Part II. Yokohama: R. Meiklejohn & Co.; Kelly & Co, 1884. pp. 109-117, p. 109.
- 4 *Ibid.*, p. 110.
- 5 *Ibid.*, p. 111.
- 6 *Ibid.*
- 7 *Ibid.*, p. 115.
- 8 アストンの講演の10年以上も後に発表されることになる山田美妙の『武蔵野』では、地の文がいわゆる「言文一致」の、当時の話し言葉に近いものであるのに対して、台詞は擬古文である。時代劇である『武蔵野』は極端な例ではあるが、ことほどさように、日本語における「話し言葉」と「書き言葉」の問題は錯綜している。
- 9 Aston, “An Ancient Japanese Classic,” p. 117.
- 10 *Ibid.*
- 11 「『土佐日記』英訳ことはじめ」『日本研究』62集、2021年、69-91頁。
- 12 Chamberlain, Basil Hall “On the Various Styles Used in Japanese Literature,” in *Transactions of The Asiatic Society of Japan*. Vol. XIII, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1885, pp. 90-109, p. 97.
- 13 Harris, Flora “Translator’s Note,” *Log of a Japanese Journey from the Province of Tosa to the Capital*, Meadville, PA: Flood & Vincent, 1891, n.p.
- 14 *Ibid.*
- 15 この雑誌は、以下の3巻にまとめられており、1983年6月号までの全30号が確認できる。*The Chrysanthemum, A Monthly Magazine for Japan and the Far East*. Vol. I, January to December 1881, Yokohama: Kelly & Co.; Vol. II, January to December 1882, Yokohama: Meiklejohn and Co.; Vol. III, January to June 1883, Yokohama: Kelly & Co. 発行所が日本アジア協会の議事録と同じであることに留意したい。
- 16 末木孝典「福澤諭吉をめぐる人々 新島襄」『三田評論ONLINE』2021年3月30日、<https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/around-yukichi->

fukuzawa/202103-1.html (2021年10月10日取得)

- 17 “Fukuzawa's lectures, one ‘on religion,’ the other on ‘Christianity, a national injury,’ *The Chrysanthemum*, Vol. I, pp. 392-396, p. 394.
- 18 小泉仰「特別講演 福澤諭吉と宗教」『イギリス哲学研究』34号、2011年、5-18頁。
- 19 “Written by the Accomplished and Virtuous Daughter of the Emperor Saga,” *The Chrysanthemum*, Vol. I, p. 97.
- 20 “On the Flowers Falling into the Lake (Written by the Daughter of the Emperor Saga),” *The Chrysanthemum*, Vol. I, pp. 216-217.
- 21 訓み下しは所京子「有智子内親王の生涯と作品」(『聖徳学園女子短期大学紀要』12号、1986年、186-172頁)による。
- 22 “To a Chrysanthemum Flower,” *The Chrysanthemum*, Vol. I, p. 3.
- 23 文部省音楽取調掛(編)『小学唱歌集』第三編、文部省、1884年、29丁表。
- 24 “*Unbeaten Tracks in Japan*. By Isabella L. Bird. (Murray),” *The Chrysanthemum*, Vol. I, pp. 275-280.
- 25 “The Classical Poetry of the Japanese. By Basil Hall Chamberlain (London: Truebner & Co., 1880),” *The Chrysanthemum*, Vol. I, pp. 318-325, 368-373, 397-404.
- 26 アストンは東京公使館にも短期間勤務していたが、より高い地位にのぼったのは神戸や長崎の公使館においてであった。東京という首都にいたことをことさら強調したかったものか。
- 27 拙稿「『土佐日記』英訳ことはじめ」、88頁。
- 28 Harris, Flora “Translator's Note,” *Tosa Nikki or the Log of a Japanese Journey*, Tokyo: Kyobunkwan, 1910, p. ii.
- 29 Porter, William N. *The Tosa Diary*, London: Henry Frowde, 1912.
- 30 *Ibid.*, p. 5.
- 31 *Ibid.*, pp. 6-7.
- 32 Bonar, H.A.C. “On Maritime Enterprise in Japan,” *Transactions of the Asiatic Society of Japan*. Vol. XV, Part I, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1887, pp. 103-125.
- 33 Porter, The Tosa Diary, p. 7.
- 34 *Ibid.*, p. 8.
- 35 この2名の素性は現在のところ不詳である。網羅的な『土佐日記』研究である池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』にはポーター訳『土佐日記』も

紹介されているが（第三部、岩波書店、1941年、330頁）、2名についての詳細はない。

- 36 McCullough, Helen Craig "A Tosa Journal," in *Kokin Wakashū: The First Imperial Anthology of Japanese Poetry*, Stanford, CA: Stanford University Press, 1985。マッカラ訳はその後、若干の推敲を加えたものが *Classical Japanese Prose: An Anthology*, Stanford, CA: Stanford University Press, 1990 に再録されている。
- 37 Porter, William N. *The Tosa Diary*, Tokyo: Tuttle, 1981。こちらは左頁が完全に日本語表記となり、Bilingual Editionと銘打たれている（ただし裏表紙に romanization とあるのは、旧版の説明書きを誤って転載したものと思われる）。また、1912年版のローマ字表記が定家本系統の本文に基づいているのに対して、ペーパーバック版では現行の為家本系統の本文が掲載されている。
- 38 Miner, Earl "The Tosa Diary," *Japanese Poetic Diaries*, Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, 1969.
- 39 Sargent, G. W. "Tosa Diary," in Keene, Donald ed. *Anthology of Japanese Literature*, New York, NY: Grove Press, 1955, pp. 82-91.